
ウルトラマン ~ Firstcontact ~

77オトシゴ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウルトラマン〜First contact〜

【Nコード】

N0653V

【作者名】

77オトシゴ

【あらすじ】

地球には様々な怪事件や異変が起こり始めていた。

それらの現象は母なる地球から、さらには宇宙から……。遠くの星から脅威が常に迫っていた。

それに対処すべく、人類は警察でも軍でもない特別な組織を作る。

その名は「科学特捜隊」通称「科特隊」である。

彼らは地球に襲いかかる脅威から人類を守る重大な任についた。

そしてこの物語は、その地球のある国、日本の科特隊と、

地球の平和を守るために立ち上がった光の戦士との出会いと戦いの

物語である。

第一話「First Contact」（ウルトラ作戦第一号）（前書き）

初代ウルトラマンの戦いを私なりに、構成しなおし、少し対象年齢を上げてお届けしたいと思います。

昔、TVの前で夢中になった人は改めて、

ウルトラマンを避けてきた人は、偉大なヒーローをこの機会に知ってほしいです。

原作と構成を一部変更してある箇所があります。ご了承ください。

第一話「First Contact」（ウルトラ作戦第一号）

プロローグ「逃走者」

地球に向かう二つの飛行物体があった。正確には、「地球に逃げる者」と「追う者」である。

「逃げる者」は青い光を発しながら地球へと降下していく。「追う者」は赤い光を発し、

青く光る逃走者を追って地球へと降下した……。

地球には様々な怪事件や異変が起こり始めていた。

それらの現象は母なる地球から、さらには宇宙から……。遠くの星から脅威が常に迫っていた。

それに対処すべく、人類は警察でも軍でもない特別な組織を作る。その名は「科特捜隊」通称「科特隊」である。

彼らは地球に襲いかかる脅威から人類を守る重大な任についた。そしてこの物語は、その地球のある国、日本の科特隊と、

地球の平和を守るために立ち上がった光の戦士との出会いと戦いの物語である。

第一話「First Contact」（ウルトラ作戦第一号）

科特隊はビートルという最新技術を詰め込んだ戦闘機を所有している。

科特隊日本支部のハヤタ隊員はビートルに乗りパトロールを行っていた。

すると、青い光を放つ飛行物体がビートルの前方に現れた。

「ハヤタより本部へ、ハヤタより本部へ。応答せよ」

「はい、こちら本部」

女性隊員が応答する。ハヤタは飛行物体の目撃を報告する。

「パトロール中に未確認飛行物体を発見。現在追跡中。追跡続行の

許可を」

すると、低い声の男性に変わる。恐らく隊長であろう。

「了解。追跡の続行を許可する。連絡次第で、我々も出動する」

「了解」

ハヤタは飛行物体のあとを追う。

「湖に向かっていているのか？」

飛行物体は近くの湖へと向かっているようだった。

飛行物体は湖の中心部で停止し、そのまま湖の中へ沈み始めた。

「どういうことだ？あの物体は何なんだろう・・・」

ハヤタは沈んでいく青い光を見ていた。だが、青い光が完全に沈んだとき、湖は赤く染まった。

ビートルの上に赤い光を放つ飛行物体が現れたのである。

その物体はかなりのスピードでこちらに向かっていた。

「あれは・・・やばいッ！ぶつかる！！！！」

ハヤタは避けきれず、赤い物体とビートルは衝突。湖のそばの森へと落下してき、炎を上げ爆発した。

ハヤタが意識を取り戻したのは不思議な空間だった。

しかし、それは目視している光景ではない。意識ははっきりしているが、体は起き上がらず、

目や口は動かない。だがはつきりしている意識で、何かの気配を感じ取る。

「そこにいるのは誰だ！」

動かない口の代わりに意識を飛ばす。すると、脳に直接イメージが伝わる。

銀色の体に赤色のライン、あやしく光る眼をした巨人の姿が伝わる。

「誰だ君は！」

「M78星雲の宇宙人だ・・・」

「M78星雲の宇宙人？」

「そうだ・・・遠い宇宙からベムラーを墓場に運ぶ途中に逃げだされ、それを追って地球に来た」

巨人はゆっくりと話す。ハヤタは疑問をぶつける。

「ベムラー？」

「宇宙の平和を乱す、凶悪な怪獣だ」

巨人は話を続ける。

「地球を守るハヤタ隊員・・・すまないことをした。代わりに私の命をあげよう」

「君はどうする？」

「私は君と一心同体となり、地球の平和のために戦おう・・・」

巨人はハヤタに何かを渡した。ハヤタの脳にはその物のイメージが伝わる。

「これは？どう使うんだ？」

「それはベーターカプセル。困ったときに使えば私の力を地球上での限界まで授けよう」

「だが、しかしッ！」

そこでハヤタに伝わる巨人のイメージが途切れた。そして、

「君と融合する。そして君は前の姿のまま、元の世界へ戻る。私とともに・・・」

ハヤタの意識も途切れてしまった。

「ハヤタから連絡は？」

「いえ、ありません・・・。ですが死体も発見されていません」

科特隊は地元警察とともにビートルの墜落現場からハヤタの死体が発見できなかった為、搜索をしていた。

「隊長！」

若い科特隊員が隊長に駆け寄る。

「ハヤタの目撃情報がありました！」

「本当か!!！」

「ですが、青い球がどうだの、赤い球がハヤタを吸い込んだのだの・・・

・わけがわかりません」

「ハヤタが目撃した飛行物体と同一の物と考えていいだろう。その赤い球も・・・」

その時だった！湖の水面から青い光が漏れだし、青い球が姿を現した。

「あれが青い球か！」

すると、その球は勢いよく爆発し、その中から巨大な怪獣が現れた。「か、怪獣だあッ！！！！」

野次馬でビートルの墜落現場を見に来ていた市民たちが騒ぎだし、一斉に逃げだした。

「皆さん！安全なところまで逃げてください！！」

隊長が声を上げる。

「科特隊、ビートルで怪獣の迎撃にあたるぞ！」

「了解！」

大きな揺れを感じ、ハヤタは目覚める。

目の前の湖には巨大な怪獣が雄叫びを上げていた。

「あれは・・・まさかベムラー？」

すると体の中から声が響く。

「そうだ・・・ベムラーだ・・・」

「！？・・・M78星雲の宇宙人・・・」

「君と一つになったことは夢でも、幻でもない・・・。ハヤタ隊員。ベムラーを倒してくれ」

「あの怪獣を？科特隊の力を使っても勝てるかどうか・・・」

「そのために私はベーターカプセルを君に渡した」

ハヤタはその手にベーターカプセルを握りしめていた。

「君に私の力を貸そう・・・宇宙の平和のために戦うことが我々M78星雲の戦士の使命であり、

地球を守ることは君への償いでもあるんだ・・・」

宇宙人と会話していると、科特隊のビートルがベムラーに攻撃をし

すると巨人は、ビートルをつかまえ、地上へと降ろした。
ビートルから出た隊員たちは巨人を見上げる。

「味方・・・なのか？」

「敵ではないだろう・・・。だが今は彼に賭けよう」

巨人はベムラーに向き直り、前傾姿勢をとり、濁った言葉にならない声で叫んだ。

ビートルを無我夢中で助けたハヤタは、自分が巨人であることを改めて実感する。

「本当に俺なのか・・・」

自分の姿はなんとなくわかるが、彼と融合したときに見た彼の姿とは少し違うようだった。

ハヤタは正面に向き直る。すると、前方には凶悪な顔がこちらを睨んでいた。

「ギャエエエアアアア!!」

「こいつを俺が倒すのか・・・」

心の声は自分に深く突き刺さった。

「この姿だからといって、勝てる保証はない・・・」
でも。だからこそ。

「俺が・・・倒す!!」

強い覇気は、声となる。

「ゼエアツ!!!」

ハヤタはベムラーに向かって走りだす。そして、力まかせに腹部を殴った。

「ギイイイ!!」

ベムラーは声を上げる。

「これなら・・・!!」

ハヤタは続けて横腹に蹴りを入れる。ベムラーは倒れ込む。

しかし、すぐさま立ち上がり、その勢いで尻尾を叩きつけてきた。

それはハヤタの体を直撃し、ハヤタは倒れ込んだ。

「い、痛い……。まるで拳銃で撃ち抜かれたような痛みだ……。ベムラーは容赦なく、倒れ込むハヤタを踏みつける。

「ク、クソオ!!!」

その時、けたたましい音が鳴り響いた。

ピコーン!ピコーン!ピコーン!

まるで危険信号のように鳴り響くそれは、

ハヤタの胸の部分についたランプのようなものが青から赤になった瞬間だった。

赤色のランプは点滅し、ハヤタを急かすようだった。

それと同時にハヤタは苦しみを感じていた。

ハヤタは踏みつけてくるベムラーの足をつかみ、払いのける。立ち上がったハヤタは胸の苦しさに、胸のランプをおさえる。

「この痛みはなんだ……。ベムラーに受けたダメージとは違う痛みだ……」

「そのランプはカラータイマー。私の活動限界を知らせるものだ……」

脳に宇宙人の意識が響く。

「活動……限界……?」

「そうだ。地球には太陽エネルギーがほとんど届かない。そのため、活動できる時間は限りなく短い……」

「なら、どうすればいいんだ……」

「私の最大の力を貸そう……」

ハヤタは自分の両腕に力が集まっっていくのを感じた。

ベムラーは体制を立て直し、熱線を吐き出す。

ハヤタはそれを避け、前傾姿勢になる。

「今だ。ハヤタ隊員……。自分の力すべてを腕に集中するんだ……」

「ウオオオオオオオオオオオ!!!!!!!!!!」

ハヤタは言われるまま、力を集中して、無我夢中で腕を交差させ、前に出した。

第一話「First Contact」(ウルトラ作戦第一号)(後書き)

どうでしたでしょうか？

「新訳ウルトラマン」とでも解釈していただければ幸いです。
これからも頑張って書いていくので、よろしくお願いします。

第二話「The first invasion」(侵略者を撃て)(前書き)

第二話「侵略者を撃て」です。

今回の主役はウルトラマンたちの宿敵バルタン星人です！

ちなみにタイトルの「The first invasion」は「最初の侵略」という意味です。

一部オリジナルと構成を変えています。ご了承ください。

第二話「The first invasion」(侵略者を撃て)

プロローグ「侵略の夜」

静かな夜だった。

特別な理由はなかったが、不気味なほどに穏やかな夜だった。しかし、未知からの侵略は地球にその刃を向けたのであった。

ガーガーガガガーガーガガガガガガ……

テレビの砂嵐のような音が科学センターに響き渡る。

「どうした!?!」

科学センターの博士は研究員に問う。

「強烈な電磁波です! 発生源は……街上空! いや、これは……
徐々に下降しています!?!」

「防衛庁に連絡を!?!」

第二話「The first invasion」(侵略者を撃て)

謎の電磁波を科学センターがキャッチした数分後、街全体が停電となる。

「な、なんだ!?!」

ハヤタはパトロールに備え、仮眠をとろうとしていたが、科特隊基地の停電に意識を覚ます。

「……な……なんだ!?!」

「何が起きたんだ?」

既に仮眠中であつた男性隊員が起きてくる。すると隊長が隊員たちのもとへ駆けてくる。

「我々はこの停電と怪電磁波の調査を行う」

「はっ」

「異常発生寸前に未確認物体を検知した科学センターに向かつてくれ。だが現在は通信不能だ」

科学センターに到着したハヤタはネクタイのセンサーが反応していることに気づく。

「・・・行こう」

「おう」

センターの中は異常な静けさであった。さらに、

「これは一体・・・」

センターのいたるところに時が止まったように硬直している人々がいた。

「完全に動かない・・・」

男性隊員は階段を上る。

すると、隊員は後方に気配を感じる。

振り向くと、異様な形をした何かが一瞬視界に入るが、すぐに消えた。その時だった！

「なんだッ！」

隊員の目の前にそれは姿を現し、隊員に光線をあびせる。

「うわあああああああ！！！！！」

隊員はその光線で他の人々と同じように硬直し、動かなくなってしまう。

「フオッフオッフオッフオッフオッフ・・・」

それは不気味な声を発し、姿を消した。

翌日の夜。

ハヤタは再び、科学センターに来ていた。

しかし、昨日の男性隊員の姿はなかった。彼はセンター内であった。彼はあの不気味な生物の光線により動かなくなったのである。

「バルタン星人・・・」

あの生物はどのような名であることが、センターの博士の残した電子通信文により判明したのである。

科特隊と防衛庁はバルタン星人が知的生命体であり、意思疎通がで

きることを知り、

安全策として、バルタンとの交渉に臨むことを決定した。

しかし、センター前にはミサイルが配備され、万が一の場合に発射できる体制になっており、

緊張した空気があたりを包み込んでいた。

「バルタンの諸君に告ぐ！君たちの行為は許されない事だ。ただちに地球から退去されたし」

返事はない。隊長が続ける。

「ただし、君たちとの話し合いをこちらは望んでいる。出てきて話し合いをしてほしい」

やはり返事はなかった。

「ハヤタ！センター内へ入って、中を確認してくれ。バルタンを発見次第連絡を」

「了解！」

ハヤタはセンターに向かって走り出した。

ハヤタはセンターの屋上へと来ていた。

途中、昨日の夜動けなくなった隊員の姿を探したが、その姿は見つけることが出来なかった。その時、

「君は！無事だったのか！！」

その隊員が機械的な動きでこちらに姿を現したのである。しかし、

「その人間は危険だ・・・離れるハヤタ隊員・・・」

脳にウルトラマンの音が響き、ハヤタは後ずさる。

「キミタチノチキュウゴハムズカシイ」

「・・・どういうことだ」

「ワタシハコノオトコノノウズイヲカリテハナシテイル」

「・・・君たちが地球にやってきた目的は？」

彼の住むバルタン星は爆発してしまった。

しかし、彼は仲間とともに宇宙旅行中だったため、
帰る場所を失ったのであった。そして彼らは自分たちの住める星を
探して、

地球の近くまで来ていた。そんなときに、彼らの宇宙船が故障して
しまい、

その修理のために地球に来たのだという。

「ではなぜここに着陸した？」

「ココニハシユウリニヒツヨウナブヒンガアツタカラダ」

「センターの人や私の友人の生命を奪ったのは？」

「セイメイ？ワカラナイ・・・セイメイトハナニカ」

沈黙するバルタン。ハヤタが続ける。

「君たちはこれから何をするつもりなのか？」

「ワタシタチノタビハココデオワツタノダ。チキユウハワレワレニ
トツテスミヨイホシニナルダロウ・・・ワレワレハチキユウニスム
コトニスル」

ハヤタは少し間を開け、バルタンに言う。

「いいでしょう。君たちが地球の風俗、習慣になじみ、地球の法律
を守るなら、

それも不可能な話ではない。君たちは何名いるのか？」

「20オクサンゼンマンホドデス」

「・・・なんて数だ・・・。火星に住んではどうだ？」

「カセイニハワレワレノキライナ・・・」

ハヤタは問いかける。

「どうした？なぜ黙ってる！」

「ソレハイエナイ」

するとバルタンはくるっと体の向きを変え、言い放つ。

「ハナシハオワリダ。ワレワレハチキユウヲモラウ」

そう言つと隊員はその場に倒れた。

すると屋上の入り口の陰からバルタン星人本体が姿を現す。

「フオッフオッフオッフオッフオッフ・・・」

第二話「The first invasion」(侵略者を撃て)(後書き)

いかがでしたでしょうか？

今回はテレビシリーズ本編より、某ウルトラマンのコミックの方を、

参考にさせていただきました。お気に入りの話だけに、

試行錯誤しましたが、お話として完成させられたので良かったですw

ではまた次回！

第三話「Vengeance demon」(前編)「科特隊宇宙へ」(前書き)

皆さん、お久しぶりです。

しばらく忙しく、執筆活動ができませんでした。が再開です！

今回は憎めないアイツの再登場です。

ちなみにタイトルの「Vengeance demon」は「復讐の鬼」という意味です。

第三話「Vengeance demon」(前編)「(科特隊宇宙へ)

プロローグ「オオトリ」

人類初の金星探査を目指し、ロケット「オオトリ」の準備が進められていた。

「オオトリ」に乗り込むのは開発者である科学者自身であった。一方、科特隊は万が一の事故に備え、救助体制をとっていた。

この時はまだ、あの影が再び地球に刃を向けていることに、ハヤタ隊員も科特隊も、気づいてはいなかった……。

第三話「Vengeance demon」(前編)「(科特隊宇宙へ)

ロケット「オオトリ」は無事に宇宙へ旅立ち、科特隊の隊員たちは安堵していた。

科特隊基地のモニターには宇宙食を楽しむ科学者の映像が流れていた。

「すごいなあ」

一人の男性隊員は科学の発展に心を躍らせていた。しかし、ガガツガアアガツ……

モニターにノイズが入る。

「なんだ？」

ハヤタ隊員は女性隊員のもとへ駆け寄る。

「何か電波が入ってるんだ」

「ええ。おかしな通信が……」

「おかしな通信？暗号か何かか？」

するとモニターに釘付けだった男性隊員が大声を出した。

「急いで僕の作った専用回路につなげてみてくれ！」

「なんだい、それは？」

「そうですね・・・全宇宙語の翻訳装置とでも言いましょうか」
「ふん」

「とにかく善は急げです！早くつなげてください！！」

「分かったわ。・・・セツト終了」

「何がでるか、ソレ！」

男性隊員は勢いよくレバーを降ろす。

すると、モニターには見覚えのある姿が映し出される。

「バルタン星人！！」

「バルタン星人はウルトラマンに倒されたんじゃない・・・」

バルタンが喋り出す。

「我々は、ウルトラマンに宇宙船ごと爆破され、光波バリアを張る間もなく、ほとんどが死んでしまった」

「生き残りがいたのか・・・」

「光波バリアってなんだ？」

「あらゆる兵器を跳ね返すバリアだ！彼らはそんなものまで作れるのか」

バルタンが再び喋り出す。

「そして、我々はようやく自分たちの住める星を見つけた。だが、我々は地球を諦めないつもりだ」

さらにバルタンは大きく言い放った。

「我々バルタンは人類に挑戦する！！！！」

一方、「オオトリ」は順調に金星へと向かっていた。が、しかし、
「な、なんだッ！！」

「オオトリ」と同じ軌道に青白く光る何かに乗ったのである。

「同じ軌道に・・・このままでは衝突する！！！！」

青白いその物体はそのまま「オオトリ」にドッキングしてしまった。

「隊長！科学センターから、オオトリからSOS信号が出されたと」

隊長が立ち上がる。

「オオトリの追跡を続行。微弱な電波も逃すな！」

「了解っ！！！」

「バルタンめっ！オオトリに手を出したな！？」

オオトリは謎の物体に取りつかれたことで、燃料が減少していた。さらに、ロケット内は異常な電波が飛び交っていた。

「なんなんだ、一体……」

すると、どこからともなく影が現れた。

「フオッフオッフオッフオッフ……」

「バルタン星人か！？」

バルタンは怪電波を科学者に向けて発した。

「うっ……アアアアアッ！！??？」

バルタンは科学者に歩み寄る。

「あっあ……何？私にのりうつる！？そんなことをして一体！やめてくれ！！やめてくれえっ！」

「フオッフオッフオッフオッフオッフ……」

「……フフフフフ、ハハハハハハハッ！！！！！」

その頃、科特隊では、オオトリの救助のため、

ビートルに大気圏内でも活動できる特殊ジェネレーターを装備し、オオトリ救助の準備を整えていた。

「こんなこともあるのかと、二つ、用意していたんですよ」

それは男性隊員の開発した新兵器であった。

「マルス133。かなりの威力を発揮するはずですよ」

「こちら科特隊。応答願います。今、こちらから救助へ向かいます」

「それはありがたい。よろしくお伝えください。もう少して燃料がゼロになりそうだ」

「もう少しの辛抱です。頑張ってください」

「・・・いよいよ来た」

科学者が手を前に出すと、手のひらから小さなバルタンが現れた。

「さあ宇宙船のみんなを指揮して、地球に出発だ！！」

バルタンが「オオトリ」を襲った目的はここにあった。

「オオトリ」の救助に科特隊を向かわせ、別の一隊が地球を占領しようというのである。

バルタンの狙いはもう一つ。

「ウルトラマンは一人だということさ。だから同時に二か所で戦闘を開始すれば、手も足も出まい！ウルトラマンなど恐れることはない。スペシウム光線を撃ってきたら、今度はスペルゲン反射盤の餌食にしてやれッ！・・・行けッ！！！！」

次回に続く・・・。

第三話「Vengeance demon」前編「科特隊宇宙へ」後書き

続きは次回、後編で！！

またお会いしましょう！

第四話「Vengeance demon」(後編)「科特隊宇宙へ」(前書き)

後編です。ついにバルタンとウルトラマンの最初の戦いに決着がつく！

どうぞ、お楽しみください！

第四話「Vengeance demon」(後編)「科特隊宇宙へ」

第三話「Vengeance demon」(後編)「科特隊宇宙へ」

「オオトリ」とドッキングしていたバルタンの宇宙船は、地球を目指し、「オオトリ」から離れた。

「科特隊、宇宙へ出撃だ。・・・発進!」

隊長の声とともに、ビートルが動き出す。

ビートルは猛スピードで発進した。

だが、バルタンの向かわせた別働隊は、既に地球に来ていた。

光波バリアーに包まれた宇宙船が地球の街上空を高速で飛行していた。

それを追うのは「マルス133」を開発し、

それを装備したビートルに乗る、男性隊員であった。

「来たなバルタン!逃げられるものか、こっちは自動追跡装置で追ってるんだから!」

すると、突如、宇宙船が静止し、中から小さなバルタンがかなりの数で出てきた。

そして編隊を組み、飛行し始めた。

ビートルはあつという間にバルタンたちに囲まれてしまった。

「あつあつ、どうすれば・・・」

男性隊員はバルタンが大勢いるという状況に圧倒され、混乱していた。

「大丈夫ですか!?!」

科特隊基地から女性隊員が呼びかける。

「隊長!バルタンが、バルタンが現れました!」

「何!?!」

「しまった！バルタンに裏をかかれたんですよ！」

「どうします？地球に引き返しますか？」

「・・・隊長！オオトリが！」

前方には「オオトリ」の姿があつた。

「・・・オオトリを発見した。乗組員を救助しだい、地球に戻る」

「地球は頼んだぞ！」

「救助力プセル、発射用意」

「くそお・・・こうなりや死んだも同然だ！いつちよやってみるか
！！！」

男性隊員はマルス133を構え、狙いを定める。

「くらえッ！！！！！」

ピイイイイ！！

マルス133の光線が目の前のバルタンに命中し、バルタンは落ちていった。

「あ、あたつたあ！」

男性隊員は次々とバルタンたちを倒していく。

バルタンたちはこれ以上の戦闘が危険だと判断したのか宇宙船へと戻っていった。

「くそお！光波バリアだな！！チクシヨオオ」

一方、乗組員の科学者を救出したハヤタ達は地球へ戻ろうとしていた。

「発進します」

「どうしました？気分が悪いんですか？」

科学者は救出されたにも関わらず、うつむき、一言も口をきかなかつた。

「フハハ、ハハハハハハハハハハッ！！！！！！！！！！！」

科学者の笑い声が響き、それと同時にビートルが激しく揺れる。

「隊長！操縦桿が利きません！！！」

ビートルはそのまま、近くの星へ墜落してしまった。

「ああ・・・おい！大丈夫か!？」

「うう、こ、ここは？地球か？」

「博士はどうした？」

「あそこです！」

隊員たちの目には、外から手を振る科学者の姿が映った。

「なんだ、やつぱり地球だったのか」

一人の男性隊員がビートルから降り、外へ出た。

「おい！」

「博士！博士!！」

男性隊員が科学者のもとへ駆け寄る。

「・・・ハアアアア!！」

しかし、科学者は鬼の形相になり、何らかの力で男性隊員を吹き飛ばした。

「フハハハハ・・・」

科学者は倒れる隊員をあざ笑い岩陰に走る。

すると、岩陰から青白い炎があがり、バルタンが巨大な姿を現した。

「フオツフオツフオツフオツフオツフオツ・・・」

さらにバルタンは、ハサミから超能力を発し、風を起こした。

その風はハヤタと隊長の乗るビートルを吹き飛ばそうとしていた。

「やらせるか!！」

ハヤタはカプセルを掲げる。

ピシャ！

ハヤタはウルトラマンになり、バルタンのもとへ飛ぶ。

「くらえッ!! スペシウム光線だ!!!」

バルタンの弱点であるスペシウムで決着をつけようとスペシウム光線を撃つウルトラマン。

だが、バルタンは胸のスペルゲン反射盤を開き、スペシウム光線を跳ね返した!

それどころか、再び超能力でウルトラマンを地上に叩き落とした。

「ダアアアッ!!??」

すかさず立ち上がるウルトラマン。

「フオッフオッフオッフオッフオッフオッフ……」

その奇怪な力をウルトラマンの行動を封じた。

「ゼエゼエゼエ……」

「ハヤタ隊員……機会を待つのだ。君と私の融合は完全になってきている。以前より活動時間は長いはずだ……」

ウルトラマンの呼びかけにハヤタは黙って了解し、バルタンを巻き起こる砂塵の中で見つめる。

そして、バルタンは好機と思い、殴りかかる。

「光線がダメなら……」

ウルトラマンはスペシウム光線とは違う構えを見せた。

「切り裂くッ!!!!……」

「ダアアッ!!」

ウルトラマンは勢いよく右手を前に出し、スペシウムを飛ばした。

光球となり放たれたスペシウムは形を変えた。

いかなるものをも切り裂く光輪に。

ピイイイイイン!!!!!!!!!!

光輪はバルタンを真っ二つに切り裂いた。

二つに分かれたバルタンは燃え上がり、消滅した。

「こちら、ウルトラマンが現れ、バルタンを倒してくれた!ピートルが役に立たなくなっただんだ」

地球では、ビートルを退いたバルタンの宇宙船から、再びバルタンたちが出現していた。

バルタンたちは街に光弾を放ち、暴れまわる。

そして、バルタンたちはひとつの大きなバルタンに姿を変え、飛行を始めた。

「ハヤタ隊員……テレポーターションを使い……」

「テレポーターション?・・・」

「瞬間的に場所を移動することができる・・・」
ウルトラマンは力を込め、地球へテレポーターションした。

ウルトラマンは無事に地球へとテレポーターションを成功させる。
そこに、あの星に現れたバルタンと同じサイズになった、バルタンが現れる。

「フオッフオッフオッフオッフ・・・」

「ヘアアアッ!」

だが、バルタンは姿を消す。

そして、ウルトラマンの背後に姿を現した。

「!?!」

「フオッフオッフオッフオッフオッフ・・・」

バルタンは力強くウルトラマンをハサミで殴った。

「ゼエアッ!」

倒れ込むウルトラマン。バルタンは追撃をしかけるため歩み寄る。

「まだまだ!・・・」

ウルトラマンは即座に起き上がり、スペシウムの光輪を飛ばす。

「八つ裂き光輪だッ!!!!!!」

しかし!バルタンは光波バリアを張り、八つ裂き光輪を跳ね返した。

「なにッ!?!?・・・」

「フオッフオッフオッフオッフオッフオッフ・・・」

だが、ハヤタの心はまだ、折れてはいなかった。

「うおおおおおおお!!・・・」

ウルトラマンは光波バリアに殴りかかる。

ビクともしないバリアにウルトラマンは右手に意識を集中させる。

「直接スペシウムをぶつける!・・・」

ウルトラマンはもう一度光波バリアを殴りつける。

そして拳から直接バリアにスペシウムの力を送り込む。

「ダアアアアッ!!!!!!」

第四話「Vengeance demon」(後編)「科特隊宇宙へ」(後書き)

いかがだったでしょうか。

次回もご期待ください!!

第五話「The last sentence」(前編)(禁じられた言葉)

物語は終焉へ向かい、急速に加速していきます。

ちなみにタイトルの「The last sentence」は「最後の宣告」という意味です。

今回はオリジナル要素が強いです。ご了承ください。

第五話「The last sentence」(前編)(禁じられた言葉)

プロローグ「Zの影」

「Z計画は進んでいますか……」

暗黒の空間。無の空間に声が響く。

「順調だ。バルタンも役に立ってくれた」

「ならばいいです。次は私が地球に行きます」

「そうか。バルタンのように私情で暴走するなよ……」

「分かっていますよ」

「貴様の任務はデータ収集だ。Zの子は動き出す時を待っているのだから……」

第五話「The last sentence」(禁じられた言葉)

ハヤタは考え込んでいた。

「バルタンの宇宙船は俺がウルトラマンになって、スペシウム光線で破壊した……。いくら20億ものバルタンが乗っていたとはいえ生き残ったとは考えにくい」

ハヤタは一つの結論にたどりつく。

「何者かがバルタンを助け、利用した……」

「私も同意見だ。ハヤタ隊員……」

ウルトラマンも意識を飛ばしてきた。

「あのバルタンの光波バリアもスペルゲン反射盤も、確実に私へ対抗するために作られていた。バルタンたちの技術力は認めるが、あそこまでのものを作る資源がある星はあまりないはずだ……」

「やはり何者かがバルタンを利用し、ウルトラマンを倒そうとした？」

「そついでるだろう……」

「やはりか」

「何がだい？」

「何って……うわっ!!」

ウルトラマンと心中で会話していたハヤタはイデ隊員が近づいてきたのに気づいていなかった。

「そんなに驚くことないでしょ」

「考え事をしてたんだ。すまない」

「いや、いいんだよ。それより聞いたかい？」

イデ隊員の問いにハヤタは答えられなかった。

「聞いた? いったい何を？」

「科特隊ロンドン支部のことさ。3日前に何者かがロンドン支部のメインコンピューターに侵入して、あるデータを盗んでいったらしい」

「あるデータ？」

「ウルトラマンのデータさ! 噂じゃ侵略者の宇宙人の仕業らしい…」

…

「……そうか」

そして数日後。

科特隊基地のメインルームに警報が鳴り響く。

「どうした!？」

隊長の声が上がる。

「何者かが科特隊日本支部のコンピューターに侵入しています!」
フジ隊員の応答に隊員たちは騒然となる。

「まさか3日前のロンドン支部の事件と関係してるんじゃない」

「わからない。だが可能性は高い」

「データファイルが開かれていきます! ブロックできません!」

「コンピューターの電源を切ればいいだろ!」

アラシ隊員が怒鳴る。

「おいおいアラシ。そんなことしたら支障をきたすのはこの基地と科特隊のネットワークだ」

「でも……」

「データファイルの……これは、ウルトラマンのデータです……！」
「フジ隊員の声とともに、ハヤタはウルトラマンに心中で問う。
「まさか、侵略宇宙人の仕業だろうか……」
「恐らくそうだろう。バルタンに協力したものかも知れない……」
「ウルトラマンのデータ完全消失！侵入者も痕跡やデータ改ざん履歴を消して、消えました」
隊長が立ち上がる。
「恐らく人間の仕業ではない。ロンドン支部と連絡を取り、対策を練ろう」
「了解！」

ハヤタは自室で考え込んでいた。

「そろそろ宇宙人が仕掛けてくるはず。何とかしなければ」と、その時だった。

「ウルトラマンになればいいですよ。地球の人間ハヤタさん……」

「！？誰だッ！！」

「姿は見せていないのでわかりませんよ。意識を飛ばしているだけです……」

「……お前がこのところのコンピューターへの侵入者か」

「その通り。君の……いや、ウルトラマンの情報を集めていた……」

「その情報を知ってどうする？」

「どうということは。任務ですから……」

「任務？ほかに黒幕がいるのか？」

「……」

「答える……！！」

「その義務はない。それより一つ、ゲームをしよう……」

「ゲーム？」

宇宙人は続ける。

「今から私が告げたところで何か起きる。それを止められたらあ

あなたの勝ち。止められなければ私の勝ちです。どうでしょう？簡単なゲームです……」

「目的はなんだ！」

「特には。ゲームですよ。ゲーム。もちろんあなた以外の参加は認められませんよ……」

「……わかった。やってやる。その代わりに、俺が勝ったらバルタンのこと、黒幕のこと。吐いてもらう」

「いいでしょう。何のことやらわかりませんが……。ではゲームスタートです！まずは、街の中心で何かが起きますよ。止めに行ってください！！……」

ハヤタは自室を飛び出し、街へと単身、向かった。

それがメフィラスの罠であるとも知らずに……。

後編に続く！！

第五話「The last sentence」(前編)(禁じられた言葉)

今回は隊員たちの名前を入れました。

後編もお楽しみに!!

第六話「The last sentence」(後編)(禁じられた言葉)

後編です。

衝撃の事実、そして・・・。

今回もオリジナル要素が強いです。ご了承ください。

第六話「The last sentence」(後編)(禁じられた言葉)

プロローグ「闇の使者」

謎の宇宙人から指示を受け、街へハヤタは来ていた。科特隊基地を出てから宇宙人からの交信はなかった。その代わり、ハヤタはウルトラマンと話していた。

「あの宇宙人……一体……」

「恐らく侵略目的の宇宙人。それもかなり知能が高い……」

「知能が?……」

「宇宙人というものにも様々な者がいる。我々のように正義を重んじ、戦う者もいれば、バルタンやあの宇宙人のように侵略行為を行う危険な者もいる。それに……」

「それに?……」

「あの宇宙人には心当たりがある。知能が高く、あの独特な話し方……。恐らくメフィラスだろう……」

「メフィラス?どんな宇宙人なんだ?……」

「凶悪な宇宙人だ。だが知能は高く、技術力も高い。それに、彼らは我々と同じM78星雲の宇宙人の祖先から生まれた我々の別種だ……」

「!?それはメフィラスもウルトラマンだというのか……」

「そう言ってもいい。しかし、住む星は別だ。もちろん彼らの星とM78星雲では環境も思想も違う。そのため我々とは対立する関係ととってもいい……」

「そうか……」

第6話「The last sentence」(後編)(禁じられた言葉)

ハヤタは街の中心、指示された場所へと来ていた。交差点は多くの人が行き交い、街は混雑していた。

「こんな場所で何があるというんだ？」

「それは今から知ってもらいましょう……」

「メフィラス!？」

「おや、私は名乗っていませんが。どうやら自己紹介は不要になったようです。そう、私はメフィラス星人。ご存知かと思いますがウルトラマンの影のようなものですよ……」

「影……」

「そう、影です。平和と正義を重んじるM78星雲の宇宙人の出来そこない。思想が違っただけで虐げられ、存在を認められていない。まさに影です……」

「……」

「さて、無駄話はここまでにしましょう。今から私の起こすことを止めてください。では、行きますよ……」

すると、交差点の中心に黒い影が現れ、こちらを睨んだ。その青い眼はまっすぐに見ていた。

「スタート!……!」

その声とともに黒い光が街を包み、時が止まる。

人々は動きを止め、信号は赤のまま止まっている。

「どういふことだ!メフィラス!」

返答はない。その時!

「何だ……あれは……?」

少し離れたところに巨大な黒い影が立ち上がり、見覚えのある形を作っていく。

「あれは、ウルトラマン!？」

黒い影はウルトラマンになり、立っている。

「ご説明しましょう」

交差点に現れた影はハヤタの方を見たまま話す。

「お前がメフィラスか？」

「そうです。ですが実態ではありません。ぼやけているでしょう?」
メフィラスの言う通り、その影はぼやけていて、はっきりしなかつ

た。

「さて、そこに現れたウルトラマンは見えますか？」

「ああ」

「そのウルトラマンは私の集めたデータをもとに作り上げられた虚像。偽物です」

メフィラスは続ける。

「そのウルトラマンをあなたに倒してほしいのです。もちろんウルトラマンになつて構いませんよ」

「なぜだ？それになぜ時を止めた！人々の命はどうなった？」

「時を止めただけです。生きていますよ。そして、今この中は、虚像の空間となっています。いくら高層ビルを壊しても現実には反映されません」

すると影のウルトラマンは目の前のビルを蹴り壊した。

「おいッ！！」

「大丈夫です。私は嘘はつきませんから。では続きを説明しましょう。今から3分間、あなた方には戦っていただきます」

メフィラスは続ける。

「そして、この虚像空間は2分で切ります」

「何！？つまり、2分以内にこの影のウルトラマンを倒せなかったら……」

「ゲームオーバー。あなたの負けです。……それでは、行きますよ！カウントダウン開始！！」

ハヤタは黒く染まる空に向かいベーターカプセルを掲げた。
ピシャ！

虚の巨人の前に赤と銀の巨人は立ち上がった。

「ヘアッ！！！！」

「フッフッフッフ……」

影のウルトラマンは不気味に笑った。

「こいつ……、くらえ！！……」

ウルトラマンは影に殴りかかる。

「ゼエアッ!!」

「ファッアアア!!」

影はそれを避ける。

「まだだ!……」

ウルトラマンは空振りした勢いで反転し、影に回し蹴りをくらわせる。

「ハアッアアアア!!??」

影は思わぬ攻撃に態勢を崩す。

「ヘアッ!」

ウルトラマンは態勢を崩した影の両腕をつかみ、そのまま前へ叩きつける。

ビルを潰しながら倒れる影。影が立ち上がると、壊れた部分が再生した。

「フフツ……ファアアア!!!!」

影が蹴りを仕掛ける。ウルトラマンはそれを受け止め、押し返した。

「……フンツ!!」
しかし、影は押し返された反動を利用し、同じ足でひざ蹴りを高速で繰り出した。

「ダアアアア!?!」

顎を蹴られ、勢いよく地面にたたきつけられるウルトラマン。

「フフフフ……」

影はウルトラマンの腹部を踏みつけ、笑い声をあげている。

「クソオ……」

「ハアアアッ!!」

影は強くウルトラマンを踏みつける。

「ゼエアアアアアア!!!!?????」

ウルトラマンは激しく苦しんだ。

影のメフィラスが声をかけてくる。

「1分経過……。大丈夫ですか?」

「あと1分……」

ウルトラマンは影の足を殴りつけ、踏みつけから脱出した。

「ヘアア……ヘアッ！」

「ファアアア！！！」

影は立ち上がったウルトラマンに向かい殴りかかる。

「ゼエアアアアア！！！！！」

ウルトラマンはとっさに右手に力を込め、影の体を切り裂いた。

影からは血のように黒いものが吹き出し、フラフラと態勢を維持できなくなっていた。

「フフフフフフフフフフフフッフフフフフフフフフウフグフグフユウユウフッグフグ……」

影は奇怪な声をあげながら姿を消した。

「おめでとうございます！あなたの勝ちです。ですが、新しいイベント発生です」

「どういう意味だ！？……」

その時！影のメフィラスは大きくなり、はっきりと姿を現した。

「フハハハハハハ！！！！！」

メフィラスはウルトラマンの腕をつかみ、空へ投げ飛ばした。

すると空が割れ、その中に吸い込まれてしまった。

空の割れ目を彷徨うこと数分、ウルトラマンは同じように別の割れ目から放り出された。

放り出された場所は静かな山岳地帯だった。

すると、黒い影が現れ、メフィラスが姿を現した。

「フフフ……。さて、ここならいいでしょう。決着をつけましょう。

これが私のゲーム、ラストステージです」

「なぜだ！戦おうと思えば街でも戦えたはず！！……」

ウルトラマンはメフィラスに問う。

「それは私のプライドです。あなたは私の用意した影に勝った。そこで強引に私が戦いを挑めば、私はひきょう者になってしまう。それは私自身が許さない」

メフィラスが手を空に広げ、叫んだ。

「光と影の戦いです！ここならだれにも邪魔はされない。種の祖先を呪った日々もこれで終わる。あなたを倒せば、地球は私のものになる。そして地球はM78星雲を滅ぼす拠点となる！！！！！」

「そんなことはさせない！！……」

「ヘアッ！！！！」

ウルトラマンは怒りの拳をメフィラスにぶつける。

「甘いですよ……」

メフィラスは片手で受け止め、もう片手で鋭い突きを繰り出した。

「ダアアアア！？」

あまりに強力な突きに、ウルトラマンは後ずさる。

「まだまだ行きますよ！！」

メフィラスはさらにウルトラマンを超能力で吹き飛ばした。

「弱い。それでも光の戦士ですか！！」

「クッ……強い……」

ハヤタはウルトラマンの姿でかつてない恐怖を感じていた。

「殺される……」

ピコーン！ピコーン！ピコーン！

恐怖に追い打ちをかけるようにカラータイマーが鳴り響く。

「苦しい……」

「あなたのような存在に劣っているとみられていたなんて……。ここで死になさい！！」

ピコーン！ピコーン！ピッピッピッ……。

「何ですか？一体」

ウルトラマンのカラータイマーが赤から青に戻ったり、赤になったりを繰り返しはじめたのである。

「カラータイマーはウルトラマンの活動限界を知らせる機械のほずデータには存在しない状態だ」

すると、ウルトラマンの周りに青白い雷が奔りだした。

「これはスペシウムが体からあふれ出ている。あまりの強さに……」

こんなことがあり得るのか!？」

メフィラスは困惑していた。

「負けれないのだ。メフィラス……」

「何？」

「私はハヤタ隊員に命を委ねた身。私の命はハヤタ隊員の命だ。彼の苦しみの中にはまだ、生きたいと思う光がある……」

「俺は……まだ負けれない。地球のために……戦う!……!……!……!……!……!」

ウルトラマンは立ち上がる。カラータイマーの点滅は止まり、その色は怒りの赤と希望の白で輝いていた。

「これがウルトラマンなのか……。感動を覚えましたよ。初めて自分の祖先に好感が持てました」

「何を言っているんだ……」

「私もそれ程に力を引き出せるとわかったからですよ!……!……!……!……!……!」

メフィラスはそう叫ぶと力を全身から放出した。

深い紫色の雷がメフィラスの体の周りを奔りだした。

「ここからが本当のラストゲームのようですね。行きますッ!……!……!」

「ゼアアアア!……!……!」

ウルトラマンは素早く八つ裂き光輪を繰り出した。

「ハアアア!」

メフィラスも黒い光球を出し、相殺させる。

「……やめにしましょう。ウルトラマン」

メフィラスは先ほどまでの覇気と殺気を沈めた。

「……」

ウルトラマンも力を沈めた。

「この戦いに意味を感じられなくなってしまった。このまま戦えば私は我を忘れて、修羅となっていたかもしれない。あなたもそうでしょう」

「……………」

「今回は私の負けとします。おとなしく引き下がらしましょう。もともと任務はあなたのデータ収集でした。あなたを倒すことではない」
「そういうとメフィラスは空に割れ目を作った。」

「待て！！お前たちの黒幕は誰だ！！目的はなんだ！！！！……………」

「そうでしたね。では一つだけ教えましょう。これから7日後にあなたは黒き炎によって焼かれ、死ぬでしょう」

「どうということだ！！……………」

「私は教えましたよ。後はあなた次第ですよ。忌まわしき遺伝子の兄弟よ……………」

「そう言い残しメフィラスは消えていった。」

「黒き炎……………一体なにがおき……………」

「ハヤタの力が尽き、ウルトラマンも消えた。」

「強い痛みが目覚めると、そこは病院のベッドの上だった。」

「おいハヤタ！大丈夫なのか？」

「隊長の顔が見える。」

「隊長……………」

「君が傷だらけで倒れていたという連絡を受けて来ていたが、やっと目覚めたか」

「やっと？隊長！俺はどれくらい眠っていましたか？」

「そうだな……………ちょうど7日だ」

「7日！？なつ何か異変はありませんか？」

「異変？特には……………」

「その時、隊長の通信機に通信が入った。」

「こちらムラマツ。どうしたフジ隊員？」

「緊急事態です！！科特隊ロンドン支部から非常事態宣言が出されました！！」

「何！？何が起きた！！」

「超多数の円盤群が地球に侵入。各地の科特隊基地、軍の基地、都

市部を攻撃、いまだ飛行中だということです」

「円盤群の目的地は？」

「それが……日本の科特隊基地へ向け移動中とのこと……」

「了解。ハヤタ隊員も意識が戻った。至急、帰還する」

「了解」

ハヤタは隊長に問う。

「何があつたんですか！……！」

「円盤群が科特隊基地日本支部に向かい、破壊行動をとりつつ移動している」

第六話「The last sentence」(後編)(禁じられた言葉)

いかがでしたでしょうか？

大幅にテレビシリーズと違う展開です。

次回から最終話に突入。三話構成の予定です。

次回もお楽しみに！

第七話「Children of Destruction」(さらばウルトラ)

地球に飛来する円盤群。

ハヤタとウルトラマン、そして科特隊の人々は地球を守れるのか！？
地球最初の大決戦が始まります……。

ちなみにタイトルの「Children of Destruction」は「破滅の子」という意味です。

今回もオリジナル要素強いです。ご了承ください。

第七話「Children of Destruction」(さらばウルトラマン)

プロローグ「破滅、襲来」

「現在の状況は!？」

ハヤタ隊員を連れ、科特隊基地に戻った隊長は声を上げる。

「円盤群は太平洋上を高速で移動中。日本へ向かっています」

「自衛隊と警察に支援要請。危険区域の住民避難と、科特隊の支援を要請してくれ!!」

「了解！」

「我々はどうするんですか？」

アラシ隊員とイデ隊員が隊長に問う。

「我々も出撃だ!ビートルの標準装備に念のためマルスも装備だ」

「了解!!」

「ハヤタ、君はどうする？」

隊長はハヤタに問いかける。

「君の力も借りたいが無理はさせたくない」

「……行きます!!!!」

「そうか。よし、出撃だ!!フジ隊員、ここは頼んだよ!!」

「任せてください!!」

第七話「Children of Destruction」(さらばウルトラマン?)

ハヤタたちは出撃した。

「フジ隊員、円盤群の日本到着予測時刻は？」

「今から五分後です」

「速いな……。何としても科特隊基地を守り抜く。市街地で食い止めるぞ!!!!!!」

「了解!!」

ビートルが市街地に到着すると、そこには自衛隊の戦闘機部隊、戦車部隊がスタンバイしていた。

「こりゃ、凄い……」

アラシ隊員はかつてない非常事態に緊張していた。

「大丈夫かアラシ？」

「大丈夫だ。それよりハヤタ。君は大丈夫なのか？」

「ああ。問題ないさ！」

その時、レーダーが警報を鳴らす。

「円盤群接近、来ます！」

イデ隊員の声とほぼ同時に海上から円盤群が姿を現す。

「戦闘機部隊、ミサイル使用許可。攻撃開始！！」

自衛隊が円盤群に攻撃を仕掛ける。

「我々も行くぞ！ミサイル及びマルスの使用を許可。全力で迎撃せよ！！」

円盤群との戦闘が始まった。

自衛隊の戦闘機部隊がミサイル攻撃を仕掛ける。

ドゴオオン！ドオオオオン！！

円盤群にミサイルが命中する。

しかし、光波バリアを張っているのか、効果はみられない。

「怯むな！戦車部隊、援護射撃開始！！」

ドンッ！ドドッ！！

地上の戦車部隊も砲撃を開始する。

「ミサイルをくらえ！！」

アラシ隊員がミサイルを放つ。

しかし、光波バリアにとってミサイルは無意味に等しかった。

「クソオオオ！！！！」

「アラシ隊員、マルスを使いましょう！」

「マルスを？でも光波バリアには効かないんじゃないか……」

アラシ隊員の意見に、イデ隊員は意気揚々と返答する。

「それは以前のマルスです。バルタンの光波バリアに効かなかった

あの日から、改良に改良を重ねて作り上げたのです！！新しいマルスを！！！！！！」

「よっしゃ、やってみるか！！」

アラシ隊員は円盤に向かいマルスを発射する。

ピイイイイ！！

「やった！！」

マルスはみごとに円盤の光波バリアを破った。

「科特隊に続け！！」

戦闘機部隊と戦車部隊も科特隊に続こうと士気を取り戻した。

「我々がマルスで光波バリアを破壊、無防備になった円盤を自衛隊と共同で撃つ。これでいこう！」

「了解！！」

しかし、円盤群も負けてはいなかった。

円盤群のビーム攻撃は市街地を焼き、自衛隊の部隊を着々と減らしていった。

「まだまだ！自衛隊の本気を見せるんだ！！」

マルスにより光波バリアを失った円盤が次々とやられていく中、

一機だけ、猛攻をかわし、自衛隊を次々に破っていく円盤がいた。

「なんだあれは！？母艦か？」

その円盤は通常の円盤と形が異なっていた。

「……何かがおかしい」

ハヤタがつぶやく。

「何がだ？」

隊長がハヤタを問う。

「いや、あの円盤だけ我々を攻撃してこないんですよ」

「……確かに。一体どういうことだ」

するとアラシ隊員とイデ隊員の乗ったビートルがその母艦に攻撃を仕掛けた。

「マルスをくらえ！」

ピイイイ！！

戦車部隊は怪獣に砲撃する。

ピロロロロロロロロ……

奇怪な電子音を発する怪獣に砲撃が命中する。

しかし、怪獣は何事もなかったように歩きはじめる。

「ゼットオオオオン……」

ハヤタはカプセルを握りしめる。

「ここで……食い止めるッ！！！！」

ピシャ！

赤い光が立ち上り、ウルトラマンが現れる。

「ヘアアアッ！！！！」

ピロロロロロロロロ……

「これ以上進ませない！！……」

ウルトラマンが怪獣に殴りかかる。

「ダアアアッ！！」

ピイン……

怪獣はウルトラマンの攻撃が当たる寸前で姿を消した。

戸惑うウルトラマン。

ピイン……

怪獣はウルトラマンの斜め後ろに現れた。

「ヘアッ！！」

ウルトラマンは振り返る。

「ゼットオオオオオン……」

怪獣は角から、火球を放った。

「ゼエアッ！！！！」

ウルトラマンはバリアを張り、火球を防いだ。

しかし、その火球の爆発は衝撃波となり、ウルトラマンを吹き飛ばした。

「ダアアアッ！！??？」

崩れ落ちるビル。ウルトラマンが起き上がるうとした瞬間！

怪獣の腹部の目のようなものが黒く染まり、黄色く戻った。

第七話「Children of Destruction」(キッズはウルトラ)

いかがでしたでしょうか？

決死の八つ裂き光輪。

消えた怪獣。はたして倒せたのでしょうか！？

また次回お会いしましょう！

第八話「Let there be light」(前編) (おひさまのひかり)

タイトルの「Let there be light」は「光あれ」という意味です。

今回もオリジナル要素が強いです。ご了承ください。

プロローグ「紅蓮と暗黒」

ハヤタは夢を見ていた。

自分の周りは炎にまかれ、人々は泣き叫び、名前を叫んだ。

「ウルトラマン!!!!!!」

ハヤタはカプセルを掲げる。しかし、カプセルは黒ずみ、光を失っていた。

すると、自分の体が徐々に消えていることに気づく。

「タタカエナイナラヨウハナイ」

「タタカエナイナライラナイ」

「タタカエナイナラコロセ」

「タタカエナイナラケセ」

「タタカエナ.....」

「タタカエ.....」

「タタカ.....」

「.....」

ハヤタは目覚めた。

「またか.....」

ハヤタが見た景色はメフィラスとの戦いの後にみた景色と同じであった。

ハヤタは病院にいた。

いつもより視界が狭い気がして、ハヤタは顔に触れる。

そして左眼に触れると、左眼は包帯で巻かれていた。

「そうか.....。あいつに焼かれたのか」

窓の外は夕焼けに染まっていた。恐ろしいほどに赤く染まっていた。

すると、ハヤタはテーブルの上に紙が置かれていることに気がついた。

第八話「Let there be light」（さらばウルトラマン？）

置かれていた紙は科特隊からであった。

ハヤタ隊員。

君が目覚めたときに状況を確認しやすいよう、ここに現在までの情報整理をしておく。

ウルトラマンが退けた怪獣を「ゼットン」と呼称。

再襲来の可能性も含め、対応を検討中だ。

同じく襲来した円盤群は母船以外は全滅した模様。

ゼットンが消えたと同時に母船も消失。

現在も地球に潜伏していると思われる。

円盤群・ゼットン戦での負傷者は現在、三十人が死亡。百人あまりが重軽傷を負った。

そして、ウルトラマンだ。不死身の戦士であると信じたいが、彼の生死は不明だ。

だが、彼の攻撃は人類に大きな抵抗の希望を残してくれた。

「希望？」

ハヤタは読むのを続ける。

彼が切り落としたゼットンの腕を解析したところ、

ゼットンの強固な皮膚の元となっているものが見つかったのだ。

さらにそこからは光波バリアの粒子も見つかっている。

そのため、ゼットンも光波バリアを張れると考え、イデ隊員がマルスの改良に全力を尽くしている。

ハヤタ隊員。

科特隊の皆は無事だ。

それにこの手紙を読んでいるということは君も大丈夫だったということだろう。

君はまさにラッキーで、ウルトラなウルトラマンだ。

彼の戦いが人類に希望を与えている。

今度は我々が希望を示す番だ。君が基地に戻ってくるのを待っている。

科特隊一同

「……ウルトラマンが希望を残した……か」

ハヤタはふと、カプセルを取り出してみる。

カプセルはひどく汚れていたが、光は灯っていた。

「もう一度。もう一度だけでいい。今度こそゼットンを倒す。もし出来なかつたら今度こそ地球は……」

ハヤタは睡魔に襲われ、再び眠った。

そして、また夢を見た。

地球が炎に包まれ、消え去る夢を。

「そうはさせない。絶対に」

悪夢は終わりにする。そう決めたから。

後編に続く！

第八話「Let there be Light」(前編) (おまけウルトラマン)

短めです。

次回、再び対峙する光の巨人と闇の子。

一体、どうなる……。

お楽しみに!!

プロローグ「決意の朝」

ハヤタは深い眠りから目覚めた。

窓からは光が差し込み、心地が良かった。

「基地に戻ろう」

ハヤタが科特隊基地に着くと、異様な雰囲気を作戦室を包んでいた。

「……どうしたんですか？」

「ハヤタ！大丈夫なのか？」

「はい。それよりどうかしたんですか？」

隊長は口を閉ざす。

「どうしたって言うんですか！一体何が……」

「……壊滅だ」

「壊滅？」

「昨夜、ロンドン本部にゼットンが襲来。基地は壊滅。死傷者は千

人を超えている」

「そんな……」

ハヤタはシヨックと恐怖の重圧に押しつぶされそうになっていた。

「恐らく、再び日本支部に仕掛けてくるはずだ」

「……イデやアラシ、フジ君は？」

「彼らはみんな自室にこもっているよ。イデは博士とマルスの改良

と新兵器の開発に取り組んでいるようだ」

「そうですか……」

すると、作戦室の扉が開き、フジ隊員が駆け込んできた。

「科特隊アメリカ支部から緊急通信です！ロンドンの臨時司令室がゼットンの円盤に占拠、隊員たちが拘束されています……！」

「何ッ!?!」

「司令室から日本支部あてにメッセージが来ています……」

「メッセージ?」

「はい。『我々は再びウルトラマンに挑戦する。Zの子を再び送り込む』と……」

「ウルトラマンに……」

ハヤタは覚悟した。

「決戦……か」

その時!作戦室にサイレンが響いた。

「何だ!?!」

「こ、これは……高速で移動する物体を確認!!これは、ゼットンです!!……!!」

「もう来たか!緊急事態宣言、避難エリアをスクラスに!政府に通知後、自衛隊と警察に支援要請だ!!」

「了解!!」

第九話「Let there be light」(後編)(さらばウルトラマン?)

ゼットンが科特隊基地のエリア内に侵入すると、地上に降り、攻撃を始めた。

ピロロロロロロロロロロロ……

「ゼットオオオン……」

ゼットンは火球を吐き出し、基地を破壊する。

ウルトラマンが切断した右腕は再生していた。

「ビートルは使えない。自衛隊の戦闘機部隊がゼットンの侵攻を食い止められなければ、我々がスーパードガンで応戦する……。だが、勝算はほぼゼロだ。イデと博士の新兵器が間に合えば、可能性はあ

るかもしれん」

着々と近づく足音。響く轟音。

「戦闘機部隊到着。戦闘を開始するようです」

フジ隊員の声と同時に戦闘機部隊がゼットンへ向かい、攻撃を開始した。

しかし、ミサイル攻撃は意味をなさなかった。

誰もがわかっていた。だが、希望を持たずにはいられなかった。

ゼットンは戦闘機を一機捕まえ、握りつぶした。

ドゴオオオオン！！！！

そして火球を吐き出し、三機の戦闘機を撃ち落とした。

「ゼットオオオン……」

「……もう我慢できない！！俺は行くッ！！！！」

その声をあげると、アラシ隊員は基地から飛び出した。

「アラシッ！！??」

アラシ隊員は外に出ると、迫りくるゼットンにスーパーガンを向けた。

「こいつ！！！！」

ピイイイイイイ！！

「ゼットオオオン……」

ゼットンはアラシに気づき、火球を放つ。

「うわああああ！！！！」

アラシの周りを炎が包む。

「くそおおおお！！」

ピロロロロロロロロロ……

その時、光はアラシの下から注いだ。

ハヤタはそれに気づき、声を上げる。

「アラシ！！逃げるッ！！！！！！！！」

その声は届かなかった。

と思つて。でもこれで踏み出せる。行くぞ!!……」
ピシャ!

燃え盛る炎の中から、光が立ち上がり、炎をかき消した。
ウルトラマンは隊長とフジ隊員を手ですくい上げ、基地のすぐそばに降ろした。

「ウルトラマン!?まさか……」

ウルトラマンの左眼は光の粒子が集まりきらず、黒ずんでいた。
ウルトラマンは基地の前に巨大なバリアを張った。

そして、ゼットンの方に向き直り、覇気で空気を震わせた。

一瞬、時間が止まったようにゼットンが止まった。

ピロロロロロロロロロロ……

「ゼットオオオン……」

「ゼアアアアツツ!!!!」

光の巨人と闇の子の決戦が始まる。

次回、最終決戦!!

第九話「Let there be light」(後編)(おまけウルトラマン)

次回、決着の時が来ます。

かつての少年たちの見た結末か。はたして……。

次回もよろしくお願いします!!

第十話「Goodbye Ultraman」(おつはウルトラマンん?)

最終話「Goodbye Ultraman」(おつはウルトラマンん?)

沈黙が支配する。

ウルトラマンとゼットンはい互いに睨みあい、動かない。すると、ゼットンが消える。

「ヘアッ!」

ウルトラマンは出現場所を予測し、避ける。

ビュン!

ゼットンはウルトラマンがいた場所の後方に現れ、空を殴った。

「ゼットオオオン……」

ゼットンは悔しさからか余裕からなのか、低い声をあげ、こちらを睨んだ。

今度はウルトラマンが仕掛ける。

「ヘアアアッ!」

ウルトラマンは右手を開いて、突き出した。

「やつの動きを止める!……」

ウルトラマンは右手から光の球を打ち出した。

その球はゼットンにあたると、ゼットンの周りを包み、鎖のように体を拘束した。

ピロロロロロロロロロ……

ゼットンは電子音を発すると、火球を吐き出した。

「ゼアアア!」

ウルトラマンは後方に回転して、避ける。

するとゼットンは、再び消えた。

ウルトラマンは後ろを向き、八つ裂き光輪を放つ。

ピイイイイイン!!!!

そこに現れたゼットンは、光波バリアを張り、八つ裂き光輪を防いだ。

ゼットンのバリアはバルタンや円盤のものとは比べ物にならないほど巨大であった。

まるで、前方の世界を拒絶しているようだった。

バリアに当たった八つ裂き光輪は砕け散った。

「ヘアアツ!？」

さらにゼットンは力を見せつけんとばかりに、光の鎖「ウルトラリング」の拘束を破った。

「ゼットオオオン……」

ゼットンはこちらに向かい、走ってきた。

ウルトラマンは迎え撃とうと、殴りつけるが、ゼットンはそれを防ぎ、ウルトラマンの顔面を殴りつける。

「ダアアアアツ!?!?!」

後ずさるウルトラマン。ゼットンはさらにウルトラマンの首を両手でつかみ、締め上げた。

「ヘアアアアアアアアアアア……」

ゼットンはその怪力で、ウルトラマンを科特隊基地の前に投げ飛ばした。

「ダアアアア……」

「ウルトラマン!?!」

隊長とフジ隊員が叫ぶ。

「ここで負けるわけにはいかない……」

ハヤタは強く思い、力を解放しはじめる。

「たとえ、戻れなくても、死んだとしても構わない……。守るべきものを守るために科特隊に入ったんだ……」

「どうするつもりだハヤタ隊員……」

ウルトラマンはハヤタに問う。

「メフィラスの時と同じように、力を解放する。ウルトラマン、力

を解放してくれ……」

「！？そんなことをすれば君は私と完全に融合してしまう。人間の姿には戻れないかもしれないんだぞ……」

「たとえそうなくても、ウルトラマンを希望として、この戦いを見守り、光を待っている人がいる……。そんな人々を守る。守りたいんだ……」

「……本当にいいのか？」

「ああ」

ウルトラマンはそれ以上何も言わなかった。

すると、体の底から力が溢れ出てくるような感覚がハヤタをおそう。ウルトラマンの体からはスペシウムが溢れ出し、雷のように光っていた。

「ゼットオオオオオオン……」

ゼットンは様子をうかがっている。

ウルトラマンを形作る光の粒子が、体から溢れ、これまでにない光を発していた。

ウルトラマンは立ち上がった。その姿はまるで光そのものだった。

「……へアアアアツ……」

ウルトラマンは眼にもとまらぬ速さでゼットンに近づいた。

ゼットンはバリアを張り、ウルトラマンの接近を防ぐ。

「ウアアアアアアアアアアアアアアアア……」

ハヤタは叫び、力を込める。

ウルトラマンはバリアに両手をあてる。

「ダアアアアア……」

ウルトラマンは溢れ出る強いスペシウムをバリアにぶつけ、叩き割った。

さらに、ゼットンを蹴り飛ばした。

ズドドオオオオン……

蹴り飛ばされたゼットンは即座に立ち上がり、火球を吐き出した。

ウルトラマンはバリアを張る。それは、ゼットンの巨大なバリアに

ゼットンには抵抗できず、ただ打ち付けられるのみであった。

「オオオオオオオウウウウウウウウ……」
ウルトラマンの唸り声はまるでゼットンへの攻撃を喜びに感じているようであった。

「なんだ……なんなんだ………」

ハヤタは恐怖と闘っていた。

ウルトラマンとして戦っていた彼はいつの間にか意識を失い、暗い空間の中にいた。

その暗闇のなかに響き渡るのは鈍く、何かを打ち付けるような音と唸り声のみであった。

「ハヤタ隊員……」

暗闇にウルトラマンが現れる。

「ウルトラマン……」

「君は私と、いや、私の力と融合してしまった」

「どうということだ？」

「君は力を欲した。こうなることを覚悟して。しかし、この状況は危険だ」

「この状況？一体何が起きたんだ!？」

ハヤタはウルトラマンを問い詰める。

「君は私自身と融合するのではなく、私のM78星雲の宇宙人としての強大すぎる力と融合してしまっただ。君の力を欲する思いと、ゼットンに対する強い思念がこの状況を引き寄せた」
ウルトラマンは続ける。

「しかし、その力と思念の融合は暴走している。今は、君の意識を離れ、自我を失った獣のようにウルトラマンの形をした力の塊がゼットンを殺そうと暴走している」

「……」

「君が悪いとは言えない。力の解放を許可した私にも責任はある」

「……どうすれば？……どうすればいい！！？？」

「君がウルトラマンの意識を奪い返せばいい。だが、それはほぼ不可能だろう」

「なぜだ！？」

「この空間にあの獣は私の意志と君の意志を封じ込めたようなんだ。ある意味、あの獣が今まで抑えられていたところに、我々が抑えられているんだ」

「もう、どうしようもないのか……」

「このままだとゼットンが倒される、いや、殺されるの方が正しいだろうか。そして破壊する対象を失った獣は、さらに暴走する……」

「まさか科特隊基地を？隊長たちを！？」

「ほぼ確実にそうなる。そして力尽きるまで地球を破壊する」

「そんな……」

ハヤタは自分の愚かさや無力さに言葉を失った。

「救いたいと思った。そう願った……。でも、それは怒りと力ではなかった。正しい力じゃない。正しい戦いじゃない……」

「……」

「争いごとに正しいも何もないかもしれない。でも、その戦いが人を救い、希望を生み出す戦いなら、俺は最後まで戦いたい……戦わなくてはならない……」

「……わかった。それがハヤタ隊員、君の答えならば、力を貸そう。これが最後になるが……」

「最後？どういふことだ？」

「私の命を君にあげよう」

ハヤタは驚きとどこか悲しげな表情でウルトラマンを見つめる。

「い、意味が分からない！俺と君は一心同体……俺は君だ！それに君は俺でもある！！何が言いたいかわからない……」

「落ち着いて聞いてほしい。確かに、君と私は一心同体。二人で一つだ。だが、今、君が生きているのは私の命を君が私と共有しているからだ。その命を切り離して、君のものにする」

ドゴオオン！ドゴオオン！

響く轟音、ゼットンはまだで人形のように頭を打ち付けられていた。しかし、状況は急変する。

ピ

ゼットンはこれまで発していたものとは違う電子音を発した。

ウルトラマンは静止する。

「ジョウキョウニンシキ……コードZ、コウドウカイシ」

まるでロボットのような言葉を発すると、ゼットンの体の黄色く光る目のようなものが、一瞬黒くなり、赤く染まった。

「ゼットオオオオオオオオオオ……」

ゼットンはウルトラマンの頭を両手でつかみ、体ごと自分の横へ叩きつけた。

「グウウウウウウアアアッ！！??」

ウルトラマンは顔面から叩きつけられた。

そして、ゼットンは立ち上がり、ウルトラマンの首をつかんで、持ち上げた。

ピロロロロロロロロロ……

ゼットンは電子音を発した。

すると、ゼットンの腕が液体のように溶け始め、ウルトラマンの首から頭の全体を包み込んだ。

「ゼットオオオオオオオオオオ……」

黒い液体はウルトラマンの顔を完全に覆っていた。

「それじゃあ、ウルトラマン！君はどうなる!?!」

ハヤタはウルトラマンに問う。

「私はスペシウムを消費し続ければ、体を維持することも可能かもしれない。その間に君を地上に帰り、ゼットンを倒す。この方

ウルトラマンは左腕を動かし、手を開いた。
その手の平からは、光があふれ、その光は手の平を飛び出し、ゆっくりと地上へ降りた。

そして、その光の中から、男が現れた。

「は、ハヤタ……!!」

科特隊基地の近くに降りた光はハヤタであった。

隊長とフジ隊員は駆け寄る。

「ハヤタ隊員！大丈夫ですか!!」

「……はっ!?こ、ここは!!??」

「何を言っているんだ君は！君は……」

「あれは、怪獣と巨人……?」

「ハヤタ隊員……」

ウルトラマンはハヤタを地上に降ろすと、右腕に力を集中し、ゼットンの両腕を切り落とした。

辺りに黒い液体が飛び散った。

地上に降り立ったウルトラマンは力を一気に解放した。

「ヘアアアアアッ!!!!」

ウルトラマンを包んでいた液体は消え去った。そしてウルトラマンの力の獣も消え去っていた。

しかし、スペシウムだけで体を維持しているウルトラマンは、まるで花火の光のようにスペシウムの青白い光を強く発していた。花火はそのまばゆい光を短い間しか維持できないにも関わらず。

「ゼットオオオオオオ……」

ゼットンは切り落とされた両手の部分から液体を出し、固めた。その液体は切り落とされた腕とまったく同じように固まっていた。

ピロロロロロロロ……

ゼットンは火球を放つ。

「ゼアアアッ!!」

ウルトラマンは科特隊基地の前に立ち、基地を火球から守った。

ズドオオオン！！！！

火球をまともにくらったウルトラマンは、膝をついてしまった。

「ゼエエエエ……ゼエエ……」

すると、科特隊基地の中から、イデ隊員と博士が出てきた。

「大丈夫ですか!？」

「イデ！博士も！新兵器は？」

「もちろん完成しました！ゼットンの右腕とウルトラマンのスペシウムがいい素材になってくれました」

「そうか……!」

「はい、これならゼットンも倒せるはずです。名付けて、『Z・U L T R A 砲』です！砲手はアラシ隊員にお願いしたいのですが……」

「アラシは……」

「そ、そんな……」

「俺がやります!」

「ハヤタ!？」

「アラシはあの怪物がやったんでしょう？あの巨人はどうやら我々を守ってくれるようです……。俺があいつをやります!」

「……分かった。君に任せる」

「ハヤタ隊員！気をつけてくれよ。その弾は一発限りだ。それもゼットンの中央部に当てなければ意味がない」

「やってみせるさ……!」

ウルトラマンは思った。

「今の私ではゼットンには勝てない。ならば、あの砲撃を確実にゼットンに命中させるしかない……」

すると、ウルトラマンは立ち上がり、ゼットンを睨んだ。

沈黙する時。世界の時間が止まったようであった。

「ダアアアアアアッ……!」

ウルトラマンはその沈黙を破り、スペシウム光線を放った。

ピイイイイイイイイイイイイイイイイイ……!」

しかし、ゼットンは腕を突き出し、スペシウム光線は吸収した。

「ヘアアッ!!」

しかし、ウルトラマンもそれを予知していたかのように、走りだし、ゼットンの背後にまわり、羽交い絞めにした。

「ウルトラマン!!!」

科特隊の隊員たちは叫んだ。

ハヤタだけがウルトラマンの名を口にできなかった。

だが、ハヤタは何かを感じとり、Z・ULTRA砲をゼットンに向けた。

「なんでだ…なんで涙が出てくるんだ…なぜ……」

ハヤタは泣いていた。見ず知らずの巨人が怨むべき怪獣の動きを、命をもって止めていることに。

「分からない…なぜ…どうしてだあああああ!!!」
ハヤタは撃った。まっすぐ吸い込まれるように砲弾がゼットンの中
央に命中し、

ゼットンの全身に青い光と黒い光が奔った。

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオン!!!!

ゼットンとウルトラマンは光をあげ、消滅した。

エピローグ「残された光」

ゼットンとの戦いは終わった。

科特隊がゼットン星人が占拠したロンドン支部に突入したが、その
姿は無かった。

そして、1年後。

科特隊日本支部。

「命をかけて戦った戦士達に、黙とう!!」

対ゼットン戦で命を落とした科特隊員と人類の希望として戦った一
人の宇宙人に祈りは捧げられた。

「ハヤタ。本当に思い出せないのか？」

「はい……。あれから1年ですが何も思い出せません。パトロール中に意識を失って、目覚めたらゼットンとウルトラマンが……」

「そうか。だが、君も立派に戦ったんだ。科特隊として。そしてこれからも、命をかけ、戦った彼らが守り抜いてくれた光を、我々は守り続けていかなければならないんだ」

「はい!!」

そう。光は残された。時代を生きていくものたちに。そして彼らは守っていかなくてはならない。

その光を次に託すために……。

光は君とともに。

完

第十話「Goodbye Ultraman」(おひはウルトラマン?) () 後書

最後まで読んでくれた方、ありがとうございました!!

現段階では決まっていますませんが、

アフターエピソードをやりたいと考えています。

それでは、また会う時まで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0653v/>

ウルトラマン ~ Firstcontact ~

2011年11月17日19時12分発行